

佐渡の広恵倉

(平成十七年五月二十九日)

新宿文化センター)

例年のように今年も佐渡で八月六日・七日と天領ゼミナールを開催します。お時間のある方はどうか顔を見て下さい。(『佐渡江戸時代史年表』佐渡史学会発行のPR)

佐渡は例の如く観光客は減る一方ですが、私どもは今くらいがいいと思つておるんです
が、何かありましたら精々お帰り頂き、激励して頂ければ宜しいかと思います。

これから広恵倉のお話をしたいと思います。広恵倉といつても、皆さんは聞いたことが
ないと思います。国産会所といわれるもので、佐渡に出来たのは非常に遅いです。佐渡に
特産物といわれるものが無いという事を教えられ、私どもは昔学校で日本の歴史を習う時
には、日本には産物が無い、領土が狭いということもあるし、ろくなものが出来ないと教
えられました。ところがヨーロッパの人が書いた書物を読みますと、日本は非常に色々な
産物があつて日本人はそれをよく利用していると皆書いている。実際には「物が無い」と
いう風に言うても「物は有る」し、「物が無い」と言うても実際には結構それを使つていて
ですから、日本は物がない国であると聞いて育つておるけれども、物が無いかというと結
構あるわけ。物が無いと言うのは、要するにそれを「利用していない」程度のことである
と承知してよろしいかと思います。佐渡はそういう意味では日本の中では物が無い、土産

というても何にも無いと。何にも無いかといえば、有ることはあるが、それを活かして来れ得なかつた。「おけさ煎餅」みたいなものはあるが、他所から習うて出来ただけの話です。江戸時代に比べても、明治以後になりましても、今も佐渡は非常に産物が少ない所のひとつです。広恵倉といいうのはそういう時に出来た国産会所で、日本では一番遅いものです。半面その分、佐渡は幕末から明治にかけて、国家といいうものをどういう風に発展させるべきかといいう事について多士済々の人材を輩出します。いつもお話しするように、三井物産初代社長の益田孝とか日露戦争の勝利に貢献した高田商会の高田慎蔵とか、そういう仲間



羽田浜の広恵倉跡（現佐渡西警察署）

益田 孝



高田慎蔵



が建白書を幕府に提出、実行に移されました。

建白書には大きな特徴が三つあります。

一番目は、他所の国から佐渡へ買い入れる物をなるべく安く買うように、特定の商人を指定して三万貫というお金を貸し渡して他の商品を買入れる。そうすれば佐渡中の者が他の商品を安く手に入れることが出来る。

二番目は、佐渡の百姓が売る米の値段が安いときに奉行所が買い集めておいて、高くなつたらそれを売り出す。いわば米価安定法です。

三番目に、莫大な益金が出る、出たら生活していく人たちのためにその資金を使う。ですから貧乏人を登録しておいて米を安く売り渡すことを盛んにやるわけです。

四番目は同じ事がらなんですが、年金を出して生活していく人を助ける。

五番目はそれに絡めて、一定以上の所得のある人たちに出し金（献金）をさせて救民する。これも一年間に四千両くらいづつ集め、四千両、米四千石ですから結構な額になります。しかも激しい米価変動によつて結果的に広恵倉に莫大な利益を蓄えさせることになつた。

これがなぜ駄目になるのか。天保九年（一八三八）に百姓一揆、いわゆる「天保の一揆

「騒動」が起き、この広恵倉を止めるべきだと訴えます。広恵倉によつて商業活動が制約された在郷商人を巻き込んだ運動になつていく。広恵倉が他国の特定の商品を買い上げていったのでは自分たちの商売が自由に出来なくなるという風に持つていく。佐渡で買うものを佐渡奉行所が特定の商人に依頼して一手に買い集めていこう、そしてそれを佐渡の人々安く売ろうというのは建前としては宜しいけれども、一般的のそれまで他国から物を買うて売つている商人にしてみれば商売がやりにくくなるということでもあります。そこをどう解決していくかが考慮に入つてない。そのために商人から反対が起きて結局駄目になつてしまします。この後幕末になりますと、これから何を考えなればならないかを再検討することになつていくのだけれども、どうしたらしいかビジョンを失つてしまふ。ですから、佐渡の明治の初めの自由民権運動というのは他所とは違つた格好であります。民権運動というのは大体佐渡と山形県と岩手県と西南戦争に負けた側が起こしたもので、どうして起こしたか、負けた側から起こさなければならぬ事情が生まれてきたからに他なりません。その話は別の機会に譲ります。

江戸中期に太宰春台（一六八〇～一七四七）という経済学者がおります。『經濟錄拾遺』

(二一巻) の「食貨」(延享元年・一七四四) にこういう事を書いております。

世の中、全て旅人だから金錢で万事が用を足すことが習俗になつてしまつた。今は習俗とは言わずに当たり前の事だという風に思うわけ、江戸時代の人たちにすればお金を使う生活をすることが習俗だった。旅人でない者も旅人と同じように米や布を宝と考えないで金銀を宝と考へるようになつた。だから野でも山でも、どこに居ようが金銀さえあれば米や布は買える、と思うようになつた。だから今の世の中は全て金銀の世界で、「米などは朝夕の飲食にあるまでにて足り、布は衣服に充てるまでにて足れり」、だから米は食うためにあり布は着るためにあると考へるようになつてしまつた。金銀にて大でも小でも一遍に金銀を用いて生活するために「天下の人は金銀を尊ぶこと昔の百倍なり」と考へるようになつた。今の世の中は米を沢山持つていて布を一杯蔵に入れていても金銀が乏しいと世に立ち難い。それは庶民の卑しい者だけでなく武士も、大臣も大名もみんなそういう事である。だからこの世の中は禄を持つていてる武士も、大臣も大名もみんな商人のごとく金銀に万事の用を足すゆえ、いかにも金銀を手に入れる事だけを考える様になつて、今世の中の最大の関心事になつていてる。人間の術は売買より他にない、売買にて利得を稼ぐ事にうつつを

ぬかしている（ということは現代でも同じ）。対馬の大名はわずか二万石の領地（佐渡は十三万石です）、しかし諸々の貨物を非常に安く買い入れて一国で占めて、非常に高く売り出しますので二万石の諸侯にしてなお余裕がある。北海道の松前侯は松前を領して七千石であるが土産（自国の產物）と蝦夷の貨物を集めて高く売り、五万石の諸侯も及ばない程の富である。石見の津和野侯（四万石）は板紙（石見半紙）を作り出し、専売し十五万の祿高に相当する富を、同じ石州の浜田侯（五万石）も津和野に倣つて板紙で十五万石以上の富を成した。つまりこれらの経済によつて國を成り立たせれば大きい大名でも小さい大名でも、



太宰春台の肖像



「経済録」(十巻)
(飯田市立中央図書館蔵)

石高ではなくてどういう物を作り出すかによって、みんなが富を考えるようになりました。ですから産物の少ないところはその民を教え導いて、樹でも草でもいろんな物を植えて、その商品を沢山売れる様にすべしと。また民には宜しく細工を教えて農業の合間に人の用に立つものを作り出さしめて他国と交易して売るようにしておこう。

(注)『経済録』は享保十四年(一七二九)刊行。これの一部を問答体で補つたもの。特に「食貨」は大幅に改変されでいる。構想や草稿は早くから出来ていたとみられるが刊行は延享元年(一七四四)。

こういうことを太宰春台が一七二九年に書いたということは、どこの藩でもどういう商品を作りだすことが出来るか、単に藩の大小とかいうのではなくて、そういうことを考えることが重要だという世の中が到来したというわけです。それから百年も経つてから国産会所ができた佐渡は日本の最後の方になってしまふ。どうしてそんなに遅れてしまつたのか。これにはいくつかの要因があります。一つは、藩主がいなかつたということです。佐渡は幕府の直轄領ですが、直轄領であつたということは佐渡に商品が生まれるという点からは非常に不幸というか、うまくなかつた。明治になつて北一輝はそういうところを衝いてきます。もう一つは佐渡の社会の仕組みがあります。これは私どもが知つておくべき事

柄の一番重要な点かと考えます。私どもがつい気が付かないでできている事柄の問題がそこ
にあります。その最も大きい問題というのは、佐渡に産物が有つたとか無かつたとかいう
よりも、佐渡が銀を産出したという事、それが佐渡を考える上で大変重要なことであります。
佐渡がどれぐらいの銀を産出していったかの記録はありませんが、慶長七年（一六〇二）
徳川家康の所へ送った銀が一万貫、月にして十五万両を納めました。佐渡には金はあまり
出ませんから殆んどが銀だつたわけです。十五万両納めますと、銀を掘っている人たち、
つまり銀山の經營者達の懐にも大体同じ十五万両くらいは残つております。その収入が佐
渡の購買力になると判断できるかと思います。江戸の初め、家康から家光くらいの頃まで
に佐渡には五万人の人が居りました。五万人が前述の収入と見合うわけであります。十五
万両くらいの物が佐渡以外から買われてくる。家の木材も食べ物も、あらゆるものが他国
から運び込まれ、佐渡で消費される。ですから佐渡で産物が生まれないというのは、佐渡
がその産物に適するとか適しないとかではなくて、佐渡の人が他所で生産した物を買うて
食べるのをクセにしたからです。元和期から正式に佐渡奉行の制度ができますが、だから
といって奉行所は佐渡の国産品を育てようというような気持ちを持たないわけで、他所か
ら生産したものを見つけてくる。相川、兩津、小木とか何か所かに「十分の一役所」という

役所を設置します。簡単に言うと、運び込んでくる、あるいは売られてくる商品の一〇ヶ^貫を税金として徴収し、それを販売する。米十俵運びこんでくれば一俵を税金として徴収し、それを売つて奉行所の収入としたわけです。ですから奉行所としては佐渡の人たちが米を作つたりすることを余り勧めなかつた。それどころか炭を焼くとか材木を植えてそれを売るというようなことを禁止したのです。佐渡の人がそんなことをしたのでは奉行所に金が入らないわけで、一〇ヶ^貫の税金を取る方がよかつた。佐渡に木があるとか無いとか、炭が出来るとか、出来ないとかには関係なく、商品を育てることに何の意も用いなかつたなんであります。これは本当に珍しいお国柄のひとつと言えるかも知れません。佐渡には特産物が最初から無かつたんです。他所の国ですと早い時期から西陣織ができるとかいう風になるのですが、佐渡は何にも無い。蚕が育ちやすいか、育ちにくいかというような問題は端から無いわけです。佐渡の人が他所から蚕を買い入れたら、奉行所としてはその一〇ヶ^貫取る方が得だつたから。そういうクセが佐渡に住んでいる皆のクセになつていきます。他所で〇〇焼きとか〇〇織物が生まれたりしますが、佐渡からは何にも出できません。何にも適さなかつたわけでもない、作ることに誰も関心を示さなかつたからです。このことを私どもは後々になりまして、どうして佐渡のものはやれなかつたのかと文句を言いますが、

言う方が無理というものです。ただ、明治以降佐渡は人を売っている、といつても他所へ多くの人材を輩出しているという意味です。でもね、東京へ来て「佐渡人会」というようなものをつくっていますが、他所ではそうではないですよ。それは佐渡の特徴のひとつで、明治以降佐渡から出てきた人々は、ずっと東京や神奈川や名古屋で関係を持ち続けていて、何か理屈があるのか私は知りませんが、故郷は同じ佐渡だと言い続けている。私は筑波に居りましたけれども、他所の人が集まって筑波会をやるかと言えば滅多にやりません。筑波にも佐渡人会があつて先生方から学生、生徒まで皆弱いからだとか言つてますが、弱かるうが強かるうがそういうことが好きなんです。こういう伝統は江戸時代の初めころからつくられ、銀が出たということは物資の輸入国ですから他所へ何かを売るということがダチカン（不得手）。今でも会合なんかで「佐渡は何かつくつて他所へ売れるようにせんといかん」と気炎あげておるのを聞くことがありますが、口先だけでやれもせず、やっても成功せず、売れなきことは皆さんご承知の通りです。

銀山で働いている武士が二百人（定員）くらい、五万人が他所から来た人ですが、もともと佐渡にいた人は三、四万人、そういう人たちもやはりそういう風潮、そういうものだという風に考えて、他国の物を買って食べる消費国であります。佐渡には大きな商人がお

りますけれども、皆他所の国から物を買うてきて財を蓄えた人たちです。例えば夷（旧両津市）の本間治左衛門、元々は新穂の人だそうですが、両津へ出て旅館をやつて大きくなつたと言われております。酒田から米を買うて佐渡へもつてきて売る、或いは出雲崎から橋屋（良寛の生家）が相川の大間に支店をつくつて越後米を買うてきて佐渡で売る、皆そういう格好の商売をしている。他所から物を買うてきて、商売をやる商人が圧倒的に多かつた。それもずっとは続きません。相川の人口は大雑把にいって一六〇〇年頃（慶長期）に五万人、それが一六五〇年頃（慶安・承応期）には一万五千人と相当な減り方をしていふ。因みに戦後佐渡の人口は十二万人、今七万を切つてゐる。だから江戸時代の慶長期あたりは人口減は相当激しいものです。他国へは行けません、労働力が不足するからです。そんなわけで承応期なると漸く他所に仕事があれば行つても宜しいということになつた。比較的早く許可になつたのは佐渡牛の牛革の他国販売、それから鉱山の石製品で、鉱山が段々衰えてきて石で造つた道具が余つたからです。

さて、それはそれで宜しいのでしょうか、銀が段々出なくなるにつれて佐渡の人が持つてゐる銀の量が減ることについて、どう対処するかという問題です。しかし消費というのは苦しいもので、錢が無くとも消費を増やすと、減らすときには非常に苦労する。消費は

減らない、銀が出ないのに佐渡は他所から物を買うことになる。佐渡奉行所は「儉約令」というものを出すようになつた。こういう時は儉約する代わりに此方から売るものを増やせば宜しいんでしょうが、世の中、割かしそういう風に考えないで、こういう法令を出して強制するのを私どもは「道徳」と呼んでおります。道徳というのは余り役に立つことがない。他の理屈を付けて止めさせるわけです。現状を変えようとするとなるならそれに応じた的確な理屈を付けるのであれば、物を買い入れるのに錢が必要なら物を売つて錢を得なければならぬ。大昔から道徳というのは非常に大切なものだという風に教えるわけですが、いまも生徒に愛国心を植え付けなきやならない、教えにやならん、そういう風に言えば愛国心を持つようになる、と。私も歴史をそういう風に教えます。それはともかく、その頃出てくるのは「自分の要る物は自分でつくれ」と、声高に言う時代になつてきました。

それでも佐渡あたりでは一七〇〇年を越えると、島内で必要な炭は島内で焼くようになります、そうすれば百姓の収入になり炭を買うために他国へお金を出さなくて済む、と役人は大声で叫ぶようになつてきました。そんなことは言われなくたつて皆知つてているわけですが、物事を考える側（奉行所）がそういう角度から考えなかつた。盛んに島内で炭を焼かせようとするものの、誰も焼きませんから政治的な色々なことをやりだします。例えば山

を、奥山を全部国有にして、それを百姓に焼かせて国が買えば百姓も楽である。その通りではありますが、天に唾するの感が無きにしも非ず、です。

似た様なことが今もあります。どつかで耳にしたんですが「今度佐渡中をトキで一杯にすれば住んでる佐渡人は迷惑するけれども、山を全部国に買い取つて貰うて、金を持ってくるようにして」と、世界のためにやつておるというような顔をして浅知恵を働かせてくる。この間飯を食つていたら、佐渡を見せに世界の観光客を連れてくる様なことをしたらと、新潟県選出の国会議員が喋つっていて、私は隣の席にいたから同意を表したんですが、こういう理屈の立て方というのはウソじやないかという感じを私は強く抱いております。

ある会合に出ましたら、百姓は田んぼをやりたがらないんだから全国からボランティアを呼んでタダでやつてもらい、そこへ泥鰌や穀物を作り、その土地を国に買って貰えれば、という様な事を公に言うておる人がおります。よい知恵だとは思うけれども世の中はそういう風には回らない。一寸でも経緯や歴史の本を勉強すればすぐわかることです。いままた昔と同じような事を言つておるし、戦後やっぱりそういう事をやつております。新穂村にトキと言つた時に、まず新穂村の山を国有にしてそれをまた新穂村に払い下げて貰う、そうして二度は儲けました。今度は佐渡市になつてもうまくいくか、そうそう問屋が卸さ

ないと思います。

正徳三年（一七二三）にタバコをめぐつて相川の羽田町の問屋たちが訴えを起こします。

これまでタバコ商人たちは一年間にいくらという税金（年貢）を納めていた。私どもはタバコの税金を納めたいと思うが、最近は佐渡の百姓がタバコを作つておつて、納める税金がどうも納まらない。だから百姓がタバコを作るのを禁止してもらいたい。もし出来ないのなら私どもが百姓のタバコを引っこ抜いて歩く、こういうことを言つた。

そこで佐渡奉行所はそれならそうするかとはいひかないわけで、百姓が烟でタバコを作るのを禁止してしまつた。税金さえ取れればそれでよかつたと考えたが、百姓たちはそうはいかない。タバコ栽培の収入が無くなる。そこで奉行所は百姓と相談してどうしたかといふと、税金を半分ずつ分けて、半分（一本・二厘五毛）は百姓、半分は問屋、という裁定を下した。そうしますと百姓はどういうことをやるかといふと、自分の本数を勘定するようになる。百姓たちは皆の烟で何本作つておるかを勘定するようになる。うまくいくかといふと、そろはいかなかつた。なぜかといふと、佐渡は元禄検地で一反歩なら一反歩につきいくらという年貢がかかつっていた。一反分を税金でとられ、そのうえタバコ一本ずつ税

金を取られたのでは自分たちは二重課税をうけることになると奉行所に主張したが認められなかつた。そして享保十四年（一七二九）、佐渡百五十か村の百姓達は、面積で税金をとられておるのだから更に一本につき税金をとられるのは国の制度として間違つておると訴えた。そうすると江戸の評定所で二重課税はやるべきでないと裁可され、うまくいかなくなつた。こういう出来事があつちこつちで起きてくるわけです。それで奉行所は百姓に税金をかけられなくなる。そういう点は今も昔も同じでありますと、奉行所が命じたと言いますが、チョットした拍子に参つたと言つてすぐ取り止めてしまう。ですから国家の法令というようなものは、何かまずい点が出てくると、たちまちのうちに切り替えられて、止めになつていくわけです。タバコの税金ひとつ見ただけでも、運用でうまくいかなくなる。かつて国産物を作つてよそから買わんですむように決意したところで、なかなかうまくはいかない。十八世紀中頃になると佐渡では国産物を沢山作れとこう言うが、国産物というものはあつちこつちで暗礁にのりあげ、うまくいかなくなる。幕府あるいは佐渡奉行所はどういうことを考えるのか、本格的に考えなければ物が余る時代が到来したのです。

お話をした事柄は佐渡が物を買った時代を史実として話しました。

米価(2割安米)		一石
寛政 12年	2月	2貫 971文
11月		4 372
享和元年	2月	4 982
11月		3 92
文化元年	2月	3 28
2年	2月	2 760
	8月	3 390
	11月	2 510
5年	正月	5 348
	11月	4 822
6年	正月	4 720
	5月	4 988
12年	正月	2 862
13年	正月	2 734
14年	2月	3 108

鉱山がだんだん縮小してきますと、よそから買うより佐渡自身で作るようになる。例えば米、相川へ売っていた米が余るようになる。これは大変な問題で、今まででは米は足りないものだとばかり思っていた。ところが元禄、享保を過ぎますと米が余る様になり、ひどい困り方をする、どんどん下がつてどうにもならなくなる。十八世紀中頃からの米値段の三分の一くらいになる。下がつて困るのは当たり前としても、何が起きるかというと凶作が起きる。私どもは凶作というと、天候が悪いと不作になる、不作になると米の値段が上がる、と言っている。ちょっとした不作で値段が激しく動くようになる。凶作という噂が現実になればたちまち米価は二倍にはねあがる。

物が余った時の経済の困り方というのは又特別で、この物が余った時に生まれてくる考え方、世界の言葉としては重商主義という言葉で教科書に登場します。

十八世紀にイギリスで物余りから生じた経済思想、私共は、こういう思想が生まれるというと直ぐイギリス人が頭が良かつたから重商主義が生まれたと馬鹿げたことを考えるが、日本人と比べてイギリス人が頭が良いかと

いうとそれは違つていて、良い時も悪い時もある。

参考書を見ますと、重商主義というのは一八世紀にイギリスで生まれた思想と書いてあるが太宰春台の本を見るとイギリスの重商主義と同じ事が書いてあるし、早い。日本でも一八世紀には重商主義の考え方方が広がり、各地で盛んに国産会所が生まれています。

いつも申し上げているように、私どもは、江戸時代は封建社会だと教えられています。相川に集まっている五万人の金銀を掘つている連中はみんな賃金もらつて飯食つております。自分の作るもののが商品として流通すると自給自足とは言わない。自給自足というのは自分が作ったものをよそに売ることを一切考えない。百姓がつくる米はよそへ売ることを目的につくる。その一部分を食う、それを自給自足とは言わない。基本的には百姓が作る米も畑で作る大豆も、よそへ売れるものは商品生産です。そして相川に住んでいる人たちは自分の家の前で玉葱を作つておろうが、五万人の人は大体よそから売りにきた物を買って生活しておる。誰からお金を貰おうが賃金で生活しておる。江戸時代のわが国の百姓は皆売るために物を作つておるし、鉱山で働いておる人たちは基本的には皆貰つたお金で物を買つて生活しておる。相川の鉱山労働者は一日働いて銀一匁が平均で、家族はそれで飯を食べている。江戸時代の初めから前借金制度というもののが出来ており、相川へ勤めに来

を買つて生活しておる。相川の鉱山労働者は一日働いて錢一夕か手取て、家方りこゝで食

るというと、今でいう支度金という形で貰い、勤めたら働いてそれを返していく。相川で働いておる金掘り人足は奴隸でも侍の従者でもない。一日いくらの賃金を貰い、それで生活をしておる人たちである。日本の鉱山はみんなそんな形をしている。世の中そういう風になりますと、一般の百姓の社会でも年季奉公がいなくなる。必要な時に賃金で百姓に雇われていくようになる。年季奉公となると身分的に支配されることを嫌い、江戸時代からみんな自由でありたいと考えている。

江戸時代の中期以降はみんなよその家に働きにゆく。その代り他所の家に働きに行けば夕飯は出して貰えるということは長く仕来りとして残つていいく。だけども、それは顔は賃金労働者であつて、牛馬ではない。働きに行く人が貧乏であることは、私たちが貧乏だから大学に勤めに行くのと共通である。家の中の一部屋を与えられ、一家族で住むイギリスの農奴のような、その家族の人物帳に入るようなことは、わが国には無い。貧乏であつても一軒として独立しておる。検地帳に載るということは、一軒一軒が独立しておることの証拠です。日本の百姓は江戸時代から独立しておるし、みんな自分のところのお寺を持つております。明らかに独立した生産者で、教科書の説明には疑問があります。農民の統制といふところを建前としていた、こういう風に今年の教科書に載つております。建前とした

というのは、自給自足の生活をしていたというのではなく、あくまで建前で、実際は違う。今のところ建前と書くのを文部省は原則としている。農民の負担する税は本年貢が主で収穫の四〇%、全部米や貨幣で納めた。これらの負担は極めて重かった。明治時代がどうしてうまいこと近代になつたのか、教科書は簡単です。幕末になるとイギリスやアメリカがやつて来て反対派を潰して政府を建てた、もしイギリスやアメリカが明治維新をうまく仕上げてやらなかつたら日本は封建社会から抜け出ることはなかつたであろうと解説しています。日本の封建社会は瓦解したとされますが、しかしモラルの歴史を見ると明治になつても何も瓦解しておらず前と同じ、名主を村長と言つた程度ですから、私どもは明治維新になつても驚かない。教科書によると、驚くように世の中が変わつたという。

話を戻しますと、自分の国のもとを他所へ売らせようとする要求が十八世紀中頃になると盛んに出てくるようになります。佐渡奉行所も百姓が作つて余つた物を他所へ売つて金をとることを禁止する訳にはいかず、許可するようになります。日本の世の中は激しく変わり始めました。

佐渡からどんな物が売られていつたか、たいして大きい金額ではないですが、お茶、いままは岩船のお茶の方がはるかに有名だけれども、もともとは佐渡のお茶の方がはるかに多

く、番茶にしか出来なかつたが、北海道へどんどん輸出した。しかし商品の作り方という点では劣つていた。佐渡は何でも手前勝手なところがあり、製品の統一というようなことは出来なんだ。こんな話があります。明治になつて、川上喚濤が両津湾で鮒を採るため大謀網を仕掛けたいと考えたが、これがうまくいかない。みんな集まつて賛成したのはいいが、一網とれたらどういう分け方をするかで喧嘩になつてしまつた。蓄えておいてそれを基にして仕掛けを展開（投資）することが出来なんだ。そこで川上は佐渡の漁師を相手にするのは止めて、能登から漁師を招いて大謀網を成功させた。能登の漁師は獲れたらその利益をすぐには分配しない。佐渡の人は金を出すより貰う方にまわる。物の生産を最初から規格では作らない、貧乏臭いばかりで、長い間のクセが身についてしまつておる。重商主義は一七二〇年代に生まれましたけれども、六〇年頃には佐渡では酒、塩、タバコ、お茶、木綿、布、そういう物は自分で作つて他所の物を買わないよう、佐渡奉行の石谷清昌（宝暦六九年在任）が布告を出した。それから、佐渡の人が伊勢参りとか京都に行つて金を使い過ぎる、他国へお金が出る事を防ぐということ。そのために物を他所へ売ろうとそういう格好をした。他国みたいに他所に売るために物を作るというより、どつちかといふと余つた物を売るような形です。佐渡で栽培した物は全部買い上げるのではなく、余つ

た物が出れば輸出する。従つて質がどうしても揃わなくなる。商品としての統一性が無い。お茶にしても、沢山作るけれども販路はせいぜい越後かその周辺に限られた。村上藩のよう人に派遣してお茶を作らせ、それをアメリカ人に飲ませてアメリカに輸出するようなことは佐渡の人には出来なかつた。佐渡はまた漆の木が非常に多い所であるが、村上や能登の漆の本家筋で認められていない。漆屋は多い時で七十軒もあつたが、他国へ金錢が流れる事を恐れるあまり自分のところの国産を増やそうという考え方が駄目だつた。徹頭徹尾他所へ売るために作るというような哲学がなかつた。それは馬鹿にしたことでなく、もともとはそういう格好で物づくりを発展させたからである。幕末頃国じゅうに成長の早い桐の木が植えられ簾笥を作ることになつた。村上藩出身の経済学者・本田利明（一七四四～一八二二）は「西域物語」で、自分の国を豊かにするには外国から金銀銅を取り込むより他に道はないと貿易振興による富国策を説いた。その金銀銅を取り込むには自國の產物を用いて外国の金銀銅と交易し、その利潤として金銀銅を得る必要があると説いた。その説ごもつともだつたが、本田利明が説いたようには村上藩でもうまいかなく、ようやくお茶と堆朱^{まいしゆ}がうまくいつたくらいです。佐渡ではそういう風に方策を書いた人さえいなかつた。佐渡はものの考え方の角度が違つていたわけである。物を売るということに魂を集め

中させなければならない。他国へ物を売つても宜しいという法律や許可を出した、というだけでは特産物として他国へ聞こえていかない。幕末の特産物をみますと、一番は北海道へのわらじである。それを聞いて越後の人は、佐渡の人は藁をまとめて草履やわらじに加工したり、竹細工を売るることは頭がいいと言うた。広恵倉をつくった時に佐渡奉行は奉行所の近くに幕府と同じように薬園を作つて沢山の薬草を作らせた。薬草を確保して輸出を考えた。

佐渡の人間は割合早くから重商主義の考え方を持つていて、明治に佐渡から出ていった人たち皆重商主義者で、日本の物を世界へ売ろうと考えた人たちです。これにまつわる有名な話を紹介しておきます。イギリス公使のパークスが「日本人は綿織物なんか生産しないでイギリスが作つた安い綿糸を買ってくれればいいんだ」と言つたが、しかし井上馨（外務卿）が「いや、わし等が作りたいんだ」という風に言つたところ、パークスは「日本人は将来我々を追い越すかも知れない」と要らぬ心配をした、という。佐渡からそういう重商主義の考えを持つた人たちが出てきたということ、そしてその日本人たちが、あるいは言い換えて、益田孝や高田慎蔵のような人たちが世界に支店を作り日本から綿織物を世界へ売り出すような世の中にならうとは、彼ら自身子供の頃には思いもよらなかつた。

あるいはもう少しあと七、八年の後に北一輝のように革命の製造者として登場してくる様なことは、明治の十年代の日本人には想像も出来なかつたことであります。最近のヨーロッパの書物を読んでおりますと、北一輝はイスラムの人達と非常に交流しております。イスラムを欧米の餌食にしないために考えを述べております。彼がそんなことを考えていたことは、これまで聞いたことがありませんが、いろいろ勉強していくようであります。彼は大変な強国論者で武力革命派、中国の孫文にも大きな影響を与えました。中国のよう負けてばかりいて勝つたことのない國の人達には受け入れ易いのかも知れません。日本は途中で勝つたり負けたりしたのでなかなかうまくいかないで、イギリスやアメリカにくつついで、やがて英米と対立することになつていきます。まあ、北の考え方が日本の指導者によつて葬り去られることになつたのは不思議な運命だと思います。わが国の近代史の中で漸く見直さなければという考え方を持つ人が多くなつてきました。

(了)